

経験値をベースにしながら歩む防災・減災教育

ー地域・有識者・各種団体とつながる学び・活動を通してー

長野県長野市立長沼小学校

校長 市川 英臣

一、はじめに ～被災地だからこそその防災教育を～



2019年10月13日、台風19号の影響により学校近くの千曲川の堤防が決壊し、学区は壊滅的な被害を受けた。本校の全ての児童が被災し、全家庭が数週間から2年間に渡り避難生活を余儀なくさせられた。

被災から2年が経ち、学校の施設も全て復旧し、ほとんどの子どもたちが自宅から通学できるようになった。コロナ禍ではあるものの、少人数校の良さを生かし、ほぼ通常の学校生活が行われるまでに回復した。

子どもたちの心の回復を心配しつつも、またいつ訪れるか分からない災害に備え、防災・減災教育を進めていくことが本校にとっては急務であると共に、地域としても学校と共に災害に強く、安全が確保できる地域作りを推進していくという願いをもっている。子どもたちの心情に配慮しながらも被災地だからこそ、様々な方の力をお借りしながら本格的な防災・減災教育の歩みを進めることにした。

二、防災・減災教育の具体的な取り組み

令和2年度末に、本校では防災教育カリキュラムを作り、それをベースにしながら実践につなげた。

1. 低学年の学習と活動

どのように進めれば良いか見えにくかったのが低学年の防災教育だった。



ほとんど避難訓練に頼っていた防災教育だが、避難訓練の経験も含め楽しみながら防災教育につなげたいという担任の願いを元に、日本赤十字社の防災プログラムに沿って進めた。

日赤指導員の指導の下、絵図を元に地震時の具体的な行動のあり方を考えた。危険を予想する力と、災害（地震）が発生した時にどのような行動をとることが自分の命を守ることになるかを考えた。

- ・安全な場所が教室の真ん中や太い柱がある場所だということが分かって良かった。
- ・地震の時、下に車がついていて動くような物は危険だということが良くわかった。
- ・自分より小さい人が近くに居たら危ない場所を教えて、安全な場所に連れて行きたい。
- ・避難したら、自分の事だけ考えるのではなくて、みんなに迷惑がかからないようにしたい。

プログラムが大変分かりやすく、子どもの気づきを中心に進めていただいたので、楽しく学べた。避難訓練の経験や避難所生活での周囲への配慮を口にするなど、自らの経験も生かした発言が見られた。

2. 高学年の学習と活動

4年生では、社会科と関連させながらハザードマップの学習と共に地域の防災関連施設の調査を行った。

ハザードマップでは真っ赤に塗られ大変危険な場所で自分たちは生活していることを知ることができた。しかし、生まれ育ったこの地域から他の場所に移動するかとの問いにはどの児童も、ここ長沼で生活を続けたいと強く望んでいることもうかがえた。学習のスタートはそんな「危険なこの長沼で自分たちはどのように安全に生活したら良いか」という学習問題が単元を貫く問いとなり、その答えを探す学習が進められた。

危険な場所ではあるものの、あれだけの大規模な水害においても犠牲者が少なかったことからそこには様々な工夫や人々の苦労があったのではないかと仮説を立て、それを元に地域



に実際足を運び、そのための工夫や取り組みを学んだ。

防災倉庫では、非常時に必要な物資が入っていることを初めて知り、安心できた。また防災無線や非常時の最大水位の表示も至る所に設置されていることを確認し、今まで気づかなかった身の回りの安全対策について、初めて意識化できた。

また、千曲川堤防から学区を見渡すと、長沼地域では堤防が一番高い場所であり、そこを千曲川が飲み込んだ場合には学区に逃げ場が無いことも知った。学区で唯一逃げ場となりうるのが「穂保の高台」と呼ばれる人工的に作られた高台の公園である。実際その場所に足を運び、周囲の様子を確認すると共に、改めて早めの避難が何よりも有効であることが確認された。

- ・ 長沼小の学区がハザードマップでは真っ赤でびっくりした。自分の住んでいる場所が危険な場所だと分かったので、早めに避難したい。
- ・ 防災倉庫や防災無線などいざという時のための準備があることを知り、ありがたかった。
- ・ 自分の家も危ないので、危険なときは早めに穂保の高台や北レクに避難したいと思った。
- ・ 防災倉庫に非常食や水など色々な物があることを知ったので少し安心した。
- ・ 逃げるときには、近所の人にも声を掛けたい。

5学年では昨年度学習した社会科の「自助・共助・公助」の考え方を関連させながら、理科で「流れる水の働き」の単元で川の流れについて学習した。また、防災グッズや災害用伝言ダイヤルなど具体的に役立つ災害対応についても学習した。

① 水害時における避難についての学習

様々な災害の中でも水害は事前に予測可能な災害である。そのため流域警戒ステージやハザードマップ、上流のライブカメラなどをチェックすることで減災につながっていく。

6年生はそうした基本情報となるハザードマップや流域警戒ステージを表す表、ライブカメラの設置場所と、そこから長沼までのタイムラグを調べ、いつどこに誰とどのように避難するか、またそれまでにどのような行動を起こしておくか、準備品は何かといった具体的な行動につながるタイムラインを作成し、家族の行動について考えた。

② タイムラインの作成

新たな流域警戒ステージに即したタイムラインを班毎に作成するワークショップ形態にした。流

域警戒ステージ1～5の中で3に達したら避難することを基本にしながら、タイムラインを完成させた。

大まかな思考としては「行動・携行品・心の面」の分野に分類し、成すべき事を洗い出した。

具体的には、スマホの充電・天気予報の確認・ニュースのチェック・ネットでライブカメラの映像確認・祖母や親戚に避難の連絡・近所の人に避難場所の確認と避難の声かけ・洗濯物の取り込み・道路状況の確認・非常食の確認・当面必要な衣服の持ち出し・土嚢の準備と設置・ブレーカーを切る・車のガソリンチェックと必要に応じ給油・避難場所の確認・車（農作業車）を土手に避難させるなど、実際に避難経験がある強みが十分生かされた。

また、携行品の面では、防災ラジオ・非常食・毛布・マスク・お金・本やカード、ゲームの持参・水・ナイフ・缶切り・懐中電灯・割り箸・乾電池各種・筆記用具とメモ・自分を証明するもの（マイナンバーカード・免許証）・着替え・医薬品（救急用品）・常備服用薬・カイロ・タオル・保険証・銀行の通帳・印鑑・ゴミ袋・レジ袋・ウェットティッシュ・ティッシュペーパー（ボックス）・避難所でのスリッパ・スマホ充電器・貴重品などがあげられ、こちらも経験値がものをいった。

心の面では落ち着いて行動する・他の人に迷惑を掛けない・自分ができることは率先して行うなど、他者に対しての配慮も感じられた。

2年前の記憶を辿りながら、自宅2Fに家電製品や重要なものを移動させることや、避難所生活での必需品や配慮事項まで詳細に書く班が多く、記憶に避難生活が残っていることがわかった。

③ 外部とのつながり

令和3年度、地域に阪神淡路大震災後に設立された防災支援団体SEEDS Asiaの長野県支部が設立され、交流の話が舞い込ん



だ。インド・バングラデシュ・フィリピン・ミャンマーと国内の三重・宮城など災害に見舞われた5カ国10校を結び、故郷の紹介と災害の状況の説明、そして防災学習の様子を互いに紹介した。初めて知る海外の災害規模の大きさに驚いていた。

特にインドの津波の大きさは想像以上のもので、水の勢いと怖さを知っている6年生にとっては、十分共感できる発表だった。またどの地域の子どもたちも酷い災害に見舞われても自分の故郷を大切に思い、移りたくないという思いを持っていることも感じられる時間になった。子どもたちからは「私たちは、何度水害に遭ってもここ長沼でがんばっていききたい」という力強い言葉が印象的だった。

④ 地域の方と共に学区の危険箇所を探す

信州大学教育学部廣内教授ご指導の元、アプリ、「フィールド・オン」を活用し災害時危険が予想される場所を写真に撮り、災害マップ作りを行った。学区の安全マップを子ども自らの手で作成すると共に、子どもたちと地域の見守り隊の方が共に学区点検を行うことで災害への共通認識ができた。



いつも登下校時に見守ってくださる「見守り隊」の方々と用水路からあふれ出る水を心配する姿や、電柱の水害予想の水位を写真にとる姿、防火ホース設置場所の確認や、カーブミラーのぐらつきなど細かな点検を行った。

毎日通る通学路を、防災・減災の視点で見ることで、日常に起こる危険について意識化できた。

毎日通る通学路にも、地震や水害、交通面で危険な場所がたくさんあり、気をつけたい。

- ・学区内の他の地域と合わせ、自分たちの防災マップができると思うととても楽しみ。
- ・フィールド・オンは写真とコメントでまとめられるのでとても分かりやすく、ありがたい。
- ・水害は起きてしまうとどうしようも無いこともあるけど、予想水位なども分かるようにしてあるので、早めの避難を心がけたい。
- ・今回作った地図で学校のみならず、地域の皆さんにも危険な場所を知らせたい。

3. 情報共有する場と地域の役員の方々への発信

10月13日は水害に見舞われた日である。この日を

「長沼防災の日」と学校では位置づけた。令和3年度はこの日にそれまで学んだ学習の成果を各学年で発表し、情報を共有するばかりか地域の防災を推進する代表者にも学校の取り組みをご覧いただき、ご意見を頂戴した。



低学年は日赤のプログラムで学んだ防災教育をクイズ形式で全校に発表した。特に地震に見舞われたときに、本棚や台車、蛍光灯、写真や絵の額、ガラス戸などが危険物に変わることを紹介すると共に、室内の安全場所を全校に伝えた。

4年生は、自分たちが学んできたハザードマップから学んだことや学区にある防災施設の発表を行い、驚いたことや新たに学んだこと、他学年に伝えたいことを中心に発表を行った。

5年生は、理科学習と絡めながら、川における増水の怖さや堤防が川の流れによって浸食されていく様子を中心に発表すると共に、防災グッズ・災害時にとるべき行動・警戒レベル・災害用伝言ダイヤル・ハザードマップについて発表した。

また、昨年度から社会科で学びを深めている「自助・共助・公助」の考え方を元に、自分がなすべきこと、地域が行うこと、公共機関が行うことの分類を行った。高学年として「自分で何ができるか」を具体的に避難時や避難所の場面で検討する中で、隣近所への声かけなど、他者にも配慮すべき点について発表できた。

地域の方々からは、この発表を地区でも行い、減災への共有を図りたいというお言葉をいただいた。



6年生は、各災害によって対応や被害が全く異なることが紹介された。地震や水害、火山噴火などの特性に応じた被害や対応、避難について発表できた。

4. 教師の取り組み

防災・減災教育は教師にとっても新たな教育分野である。地球温暖化の影響もあり、毎年のように災害に見舞われる日本にとってこの分野の教育は必要不可欠になっている。しかし、教師にはそうした分野の研修機会が少なく、今回の研修やそのノウハウが次の勤務先でも学校や子どもの安全を保



障していくものとなることを期待した。

この研修では、一足先にできた長沼地区のタイムラインをベースにしながら、流域警戒ステージ3を中心にその前後に職員がどのように動くかをイメージしながら、学校の施設や備品などの物品の保護、児童の安全確保、避難所での受け入れ準備、職員の車の移動などを考えた。

施設対応・児童対応・重要物品対応と分担を決め、具体的な職員名を入れてタイムラインを考えた。

また、5回の研修は長野市危機管理防災課の担当職員や長野市教育委員会学校教育課の指導主事、そして長沼地区住民自治協議会防災担当区長にも参加いただくと共に、作成に関して丁寧に御助言いただき、様々な機関と連携がとれるよう横つながりも意識した。

学校にとって一番の収穫は、“地域と共に”防災・減災に向け協力でき始めたことである。

- ・ 何をどのようにという具体的なことはこうして実際作成しなければ分からないので、良い経験。
- ・ 施設、物、子どもと分けたことで考えが整理でき、具体的な動きが見えてきた。
- ・ 今後生きる有意義な研修になった。
- ・ 本当に様々な視点や視野で考えることが必要だと分かった。
- ・ 他校に転任するときに、長沼にいたことが自信につながり、胸を張って異動できる力になった気がした。今後赴任する学校の職員や子どもたちにも広めたい貴重な研修の機会になった。

地域や各機関との連携が重要であるということを改めて感じた。学校は単独であるのでは無く、地域や行政と密接につながっていることも再認識できた。「地域との連携」とよく言われるが、一番大事な安全面でこうした連携ができていて実践は少ないだけに、職員や行政、地域や保護者からも高い評価につながった。



三、まとめ

防災教育の必要性は東日本大震災以降学校現場で語られ、実践されることが年々増えてきた。

しかし、子どもはもとより教師の経験がその学習の広がりや深まりに強く影響し、経験値で語られる実践

には重みや具体が必ず付随している。本年度の実践は本校にとって本格的な防災教育のスタートであったが、体系化も組織化もまだまだ未熟であり、前年度末に作成した各教科・領域を網羅した「防災教育カリキュラム」の実践ができるかどうかというレベルからのスタートだった。

また、児童の心理状態に心配し、防災教育を進めてもよいのか、まだ早いのかといった心配も抱えつつ子どもの様子を見ながら少しずつ学習を進めた。

2学期から本格的にスタートした防災教育だが、実践から多くのことを学ぶことができた。

- ① 水害の経験から防災・減災教育に強い関心を持ち、犠牲者を出さないよう真剣に取り組んでいた。
- ② 教師も防災教育について、ノウハウが不足していた。日本赤十字社や有識者、防災担当の行政担当者、国土交通省の担当者、教育委員会、住民自治協議会の防災担当者、ボランティア団体をはじめ各種団体の支援を得ながら学習を進めていくことが何より確実で正しい防災学習につながる。
- ③ 教師もタイムラインを作成することで防災教育について意識の醸成がなされ、緊急時に具体的な動きをイメージでき、現実に役立つ指導と学習を始める足がかりになり、自信にもつながった。
- ④ 子どもも職員も様々なつながりや関わりを通して多面的で多角的な視野を持つことで新たな視点で防災教育に取り組めた。
- ⑤ 学校が単体で動くのではなく、自助・共助・公助という感覚を大切にしながら、各家庭や避難場所や地域といった、子どもを取り巻く環境全体で防災教育を広く捉えられるようになった。
- ⑥ そして何より、早めに避難や荷物の移動などを行う事が減災につながることを学んだ。

スタート当初は一般的な呼称である「防災教育」だったが、そのうちに自然災害を防ぐことは難しく「減災教育」という呼称の方が学校現場としては適切だという考えが主流になった。このことは職員の防災教育への意識の高まりだと歓迎したい。

防災・減災教育は、幼い内から発達段階に応じ、分かりやすく、適時適切に指導し考えさせていくと共に、そのような行動ができるような体を作っていくこと、とっさの時に瞬時に迷わず判断ができる子どもを育てていくことが何より重要である。

課題はまだまだあるが「人命が一番大切」…これを

中心にしながら「早めの行動」と「日頃からの準備」
を大切にしながらこれからも本校・本学区から犠牲者
を出さないよう引き続き地域や有識者，各種団体と手
を携えながら防災・減災学習に取り組んでいきたい。

（執筆責任者 令和３年度 校長 下 育郎）